The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Gerund の史的解説
Author(s)	加藤, 正治
Citation	大阪外大英米研究. 1987, 15, p. 35-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99100
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Gerund の史的解説*

加　藤　正　治

1.　動名詞の起源

(a)　語尾の起源――　OE　は他のゴート語系の言語と同じく動詞的名詞(verbal noun)を二種類もっていた。一つは接尾辞 -ung をもつ形式で，弱変化動詞の第2類から形成される女性抽象名詞であった (e.g.　hergung<hergian(=plunder), wilnung<wilnian(=desire))。もう一つは接尾辞 -ing をもつ形式で，弱変化動詞の第1類から形成され，やはり女性抽象名詞であった(e.g. hering<herian(=praise), rǣding<rǣdan(=advise))。-ung 形の動詞的名詞のほうが優勢であって，-ing 形のほうは少なかった。強変化動詞から形成される動詞的名詞は若干のものが　OE　時代の最後数10年間に出現したが(e.g.　brecung<brecan(=break),　blāwung<blāwan(=blow)),　この頃でもまだ -ung 形のほうが優勢であった。ME の時代になると，-ung 形は，13世紀中頃まで南西部において一部保持されたのを除けば消失し，-ing　形のほうが一般的な形式になった。12～13世紀あるいはもっと後になって，ほとんどの強変化動詞からも動詞的名詞が形成されるようになり，また13世紀からはフランス語系の単語から形成された例もみうけられる (e.g. spusing(=espousal), riwlunge(=ruling), serving(=serving), assaillynge(=assailing), plainynge(=complaint))。そしておそらく15世紀の初期になってはじめて -ing を用いた語形成が定着し，どのような動詞からも自由に形成できるようになったと思われる。

(b)　統語的特徴の起源――起源から言うと純然たる名詞であった -ing 形が次第に動詞的性格を帯びるようになったのは現在分詞及び不定詞との混同が原因であるとする考え方が有力である。OE の現在分詞は接尾辞として -ende

及び -inde をもっていたが，OE 後期以降特に南部方言で -inde が圧倒的に優勢になった。ME の時代初期には南部方言では -inde，中部方言では -ende，後に南部の影響によってたいていは -inde，北部方言では -and が通例の形式であった。南部・中部方言では1200年頃から -inge，-ynge の形式の現在分詞が現われはじめ，従来の -inde，-ende の形式を駆逐した。南部・中部方言で一般的に用いられていた -inde の末尾の e 及びその前の d の音が消失して [-in] という発音になり，一方，動詞的名詞の接尾辞 -ing は OE 後期以来末尾の g の音を失う傾向があり [-in] という発音になった。このように現在分詞の接尾辞 -inde と動詞的名詞の接尾辞 -ing が同音になったために混同がおこり，-ing がその形式を現在分詞に与えたために現在分詞の接尾辞として -inge，-ynge が生じたのである。他方不定詞には OE において -an で終わる原形不定詞と -enne で終わる屈折不定詞（to 付きで現われるので To- 不定詞とも呼ばれる）の二種類があった。この後者の -enne は，ME 時代初期に末尾の e 及びその前の n の音の消失が起こり，[-in] という発音になった。従って上述の現在分詞の場合と同じく動詞的名詞と発音上区別がつかなくなり混同が生じた。実際12世紀以降の南部方言のいくつかで -inge，-ynge をもつ屈折不定詞はかなり一般的であった。このように現在分詞及び不定詞と同形になった動詞的名詞は，それらから動詞的特徴を吸収し現在のような動名詞に発達したのである。

2．動名詞の主語

OE の動詞的名詞は純然たる名詞であったのでその主語は属格形で現われていた。mid *hira ðingengum*（=with their intercessions）(Sweet (ed.)：*King Alfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care*）[小野・中尾 1980] / ac he nolde nan þing don be *þæs deofles fæcunge*.（=but he would do nothing at the direction of the devil）(Sweet: *Selected Homilies of Ælfric*）[Curme 1912] ME においても主語は属格形で表わされていたが，「of-名詞」で表わされることもあった。Mery (=delightful) it is in *sonnes risynge* (*The Life of Alexander: Kyng Alisaunder* Laud) [中尾 1972] / thenne muste ye promyse to

leue(=leave)*your steelyng* and *rouynge* (=roving)(Caxton: *Reynard the Fox*) [MEG](それでは盗むこととうろつきまわることはやめると約束しなさい) // There dyed(=died)many a man sore Be (=by)*rysynge of the sune* (=sun) (*Ipomedon*) [中尾 1972](太陽が昇る時までにたくさんの人々が苦しんで死んだ) / the *shynyng of the stone* made and gaf(=gave)as grete a lyghte as it had been mydday(Caxton: *Reynard the Fox*) [MEG](その石が輝いて，あたかも真昼であったかのように思われるくらいものすごく明るくなった)

通格の名詞が動名詞の主語として用いられるのは13世紀初めからで，その後急速に広まり15世紀になると極めて普通の形式となる。この形式は OE から受け継がれた「属格名詞＋動名詞」の構造に由来し，その主語として機能する名詞が属格形になることが不可能であるか，可能であってもぎこちない形になるか，あるいは属格形が通格形と同形である，といったようなことが原因で生じた。また別に古フランス語のジェロンディフ(gérondif)の模写と考えられるものもある。Thoru *corn wanting* or thoru were(=on account of corn being scarce(everywhere)or in consequence of war)(*Cursor Mundi*) [van der Gaaf 1928] / at was showet apertly by *temples* and *images fallyng* doun In Rome(=that was shown manifestly by temples and images falling down in Rome)(*A Stanzaic Life of Christ*) [*ibid.*](そのことは，ローマにおいて寺院や神像が倒れたことによってはっきりと示された) // For the *quene comynge* he was fol glad(=For the queen's coming he was very glad)(*The Story of England by Robert Manning of Brunne*) [*ibid.*](古フランス語の gérondif の模倣) 尚，代名詞が動名詞の主語として機能するときには属格形をとるのが通例で，目的格形は15世紀末まで起こらない。Humbly requyryng and besechyng my sayd lord to take no displaysir on *me* so *presumyng*(*The Dicts and Sayings of the Philosophers*)[中尾 1972](前述の私の御主人様が私の差し出がましいところに対して寛容であられますよう謹んでお願申し上げます) Mod. E 以降は，属格の主語，通格の主語（代名詞の場合は目的格）ともに用いられる。また「of-名詞」が主語になっている例もみられるが，あまり用いられないようであ

る。the strangeness of *Mr. Collins's making* two offers of marriage within three days (Austen: *Pride and Prejudice*) [MEG] (コリンズ氏が三日間のうちに二回結婚の申し込みをしたことの奇妙さ) / But who ever heard of *them eating* an owl (Thackeray: *The Newcomes*) [Poutsma] (彼らがふくろうを食べるなんて話誰が耳にしたでしょう (誰もそんな話は耳にしたことはありません)) / I'm surprised at $\left\{\begin{matrix}his\ /\ John's \\ him\ /\ John\end{matrix}\right\}$ *making* that mistake. [Quirk *et at.* 1972] (彼 / ジョンがそんな失敗をしたのには驚いた) // They had not been abashed by the unexpected *coming in of Steerforth* (Dickens: *David Copperfield*) [MEG] (スティアフォースが不意に入って来たのに彼らはどぎまぎしなかった)

3. 動名詞の目的語

OE において動名詞は純粋の名詞として機能していたので，その目的語は属格の名詞で表わされていた。(OE 後期にはごく稀に「of–名詞」でも表わされた。) toeacan *pæs landes sceawunge* (=in addition to observing the land) (*King Alfred's Orosius*) [Tajima 1985) / ðonne seo sawul bið to *hire witnunge* gelæd (=when the soul shall be led to its punishment) (*Ælfric's Catholic Homilies*) [小野・中尾 1980]

ME 期では，目的語を表わす属格名詞を伴う形式は初期まで普通に用いられたが，後期以降は廃れてしまっている。属格名詞の交替形として現れた「of–名詞」を伴う形式は，動名詞の前に the, this, that などの定決定詞 (definite determiner) を伴わない形式が13世紀後半以降発達し始め，きわめて頻繁にみられる形式となる。そして14世紀後半に最高潮に達した後どんどんと減少し，現代英語では廃れてしまっている。一方，定決定詞を伴う形式は1200年以前に最初の例は見い出されるが，頻繁に用いられるようになるのは1300年以降で，15世紀には定決定詞を伴わない形式よりもよく用いられるようになる。*gisc-inge of louerd–hed* (=coveting of lordship) (*The Story of Genesis and Exodus*) [中尾 1972] / they speken of sondry (=sundry) *harding of metal* (Chaucer: *The Canterbury Tales*: *The Squire's Tale*) (彼らは金属を硬くするいろいろな方法

について話した）// The Kyng of Sodom ȝede (=went) out into *the aȝengoyng of him* (Wyclif: *Bible*) [OED]（ソドムの王は外へ出て彼を迎えた）/ in *pis* blynde *beholdyng of synne*. (*The Cloud of Unknowing*) [Tajima 1985]（このように罪を批判的に見ることができない場合）

また ME 期には，目的語として通格の名詞（代名詞の場合は目的格）を前に伴う動名詞が14世紀まで頻繁に用いられたが，後期になって急速に衰えた。この形式の起源としては，1）古フランス語のジェロンディフ（gérondif）を模倣したものとする考え方，2）OE の lustfullung (lust+fullung)，godspelbodung (godspel(l)+bodung) のごとき「目的語＋動詞的名詞」の複合語構造が分解して生じたとする考え方，3）OE の「属格名詞＋動詞的名詞」の形式の中の属格名詞の屈折語尾が消失し，通格形と区別ができなくなった形式を起源とする考え方，4）OE の「目的語＋現在分詞」を起源とする考え方，がある。thurgh *fals miracles shewyng* (=through showing false miracles) (Hampole: *The Pricke of Conscience*) [van der Gaaf 1928]（偽の奇跡を見せることによって）/ Fals wijtnes and *trouth breking*, Mans slaghter and *hus brening* (=burning), (*Cursor Mundi*) [Tajima 1985]（偽証と背信，殺人と放火）

動名詞が [of の付かない] 目的語を後に伴う形式は ME 期に現われる。前に定決定詞を伴わない形式は13世紀後半に現われ，その後非常にゆっくりではあるが着実に発達してきている。定決定詞を伴う形式は14世紀前半に最初の例がみられ，その後もずっと例が見られるが，ただし非常に稀である。in *getynge richesses*, ye mosten flee ydelness (Chaucer: *The Canterbury Tales: The Tale of Melibee*)（富を手に入れる際には怠けることをやめなければならない）/ yn *feblyng* (=enfeebling) *pe body* with moche fastyng (*Robert of Brunne's Handlyng Synne*) [中尾 1972, Tajima 1985]（大いに断食をすることによって身体を衰弱させる）// *the wythholdyng you* fro it can doo yow no good (Caxton: *Reynard the Fox*) [MEG]（あなたがそれをしないでおくことはあなたの為にはなり得ない）/ *This shewyng shrifte*... shal be meryte to the (=thee); (*The Vision of William concerning Piers the Plowman*) [Tajima

1985]（このように懺悔の気持を表わすことはきっと神の御前であなたの功徳とされましょう）

Mod. E 以降では，目的語として属格の名詞を前に伴う動名詞はすでに廃れてしまっている。通格の名詞（代名詞の場合は目的格）を前に伴う動名詞は後期 ME で急速に衰えたが，初期 Mod. E ではまだ見うけられる。目的語として「of-名詞」を従える動名詞については，定決定詞を伴わない形式は1800年頃から of の付かない目的語を従える形式に駆逐され始め，PE では廃れた。他方，定決定詞を伴う形式は PE でも生き延びている。目的語として of の付かない名詞を直接従える動名詞について，定決定詞を前に伴わない形式は初期 Mod. E でかなり頻繁に用いられ，それ以後着実に発達してきている。定決定詞を伴う形式は一応例は見い出されるが非常に稀で，PE では古語となっている。I hear of *rare matters putting* in order in Scotland.（=I hear of precious things being put in order in Scotland)(Ellis: *Original Letters Illustrative of English History*) [van der Gaaf 1928]（スコットランドでは貴重なものは整理されるそうである）// This way of journal is the worst in the world for *writing of news*.（Swift: *Journal to Stella*) [MEG]（日誌のこういうやり方はたよりを書くのに最もまずいやり方だ）/ Leave *wringing of your hands* (Shakespeare: *Hamlet*)（手を絞るのはおやめなさい）// In the ordinary English upper-class family, *the killing of birds* is considered highly creditable, and *the killing of men* in war is regarded as the noblest of professions.（Russel: *On Education*) [MEG]（普通の英国の上流階級の家庭では，鳥を殺すことは非常に立派なことであると考えられ，戦争で人を殺すことは職業のうちで最も高尚なものとみなされている）// in *converting Jews* to Christians, you raise the price of pork.（Shakespeare: *The Merchant of Venice*)（ユダヤ教徒をキリスト教徒に改宗させる時には，豚肉の値段を上げる）// I have another reason for refraining to shoot, besides *the fearing discomfiture and disgrace*.（Scott: *Ivanhoe*) [Poutsma]（撃つのを差し控えるのには，失敗と不名誉を恐れているだけでなくもう一つ別の理由がある）

4．副詞的修飾語

動名詞と副詞的修飾語の結合はOE期では「副詞的要素＋動詞的名詞」という形式の複合語の形でみられる。即ち，現代語風に表わせばuplifting, downfalling, ingoingのような形式であった。ここで用いられる副詞的要素は現代語のafter, in, over, upなどに相当する前置詞的副詞（prepositional adverb）である。ME期に入るとこの形式は14世紀中頃まで優勢であったが，その後急速に廃れた。この形式に代わる形式として1200年頃に「動名詞＋副詞」が初めて出現する。この形式で単純副詞が用いられたものは14世紀までは極めて稀にしかみられないが，14世紀中頃から上記の複合語の形式の大半にとって代わり優勢になった。この新しい形式は上記の複合語の形式が分解されて副詞と動名詞の二つの独立した成分になり，副詞が動名詞の後に置かれたことにより生じた。従って最初は「動名詞＋前置詞的副詞」の形式であったが，時代が進むにつれてもっといろいろな副詞が用いられるようになった。この形式の多くは動名詞の前に決定詞を伴うか，もしくは「of-名詞」の形の目的語を伴い（時としてその両方），動詞的性格と名詞的性格を併せ持っていた。また時には強調のためかあるいは韻を合わせるために副詞が動名詞の前に置かれることがあるが，これは上記の複合語の形式とは区別されるべきである。単純副詞の代わりに副詞句（adverb phrase）が動名詞の後に用いられる形式は14世紀前半に頻繁に用いられるようになったが，通例の形式として用いられるようになるのは14世紀後半になってからである。単純副詞を伴う形式と同じく，決定詞かあるいは「of-名詞」の形の目的語（時としてその両方）を伴うものが多い。また，あまり頻繁ではないが副詞句が動名詞の前に置かれる例もみられる。

Often þai（＝they）made *dounfalleing* & when þai miȝt（＝might），*vpriseing*. (*Of Arthour and of Merlin*) [OED]（彼らはしばしばころんだが，できる場合には起き上がった）/ her tyme of *out-fleynge* (Chaucer: *The House of Fame*) [Tajima 1985] // oure *goynge out*（*Voiage and Travaile of Sir John Maundeville*）/ And ofte tyme swich *cursynge wrongfully* retorneth（＝returns）agayn to him

that curseth (Chaucer: *The Canterbury Tales: The Parson's Tale*) (そのように不当にのろうと，逆にそれがのろう人自身に返ってくることがしばしばある) / a man shal not wyth *ones* (=once) *ouer* (=over) *redyng* fynde the ryght vnderstandyng. (Caxton: *Reynard the Fox*) [MEG] (一度読み通しただけでは正しく理解できないだろう) // *stappyng* (=*stepping*) *on a too* (=*toe*) of a styncande (=stinking) frere (=friar) (*Pierce the Ploughmans Crede*) [Tajima 1985] (臭いにおいのする修道士をおこらせること) / Ensaumple of þe first maner is þis: feding, ... *out of prisoun quytyng* (*The Donet by Reginald Pecock*) [*Tajima* 1985] (第一類の例は次のようなものである：食物を与えること，……牢獄から抜け出ること)

Mod. E 以降は複合語の形式は廃れているが，副詞語句を前もしくは後に伴う形は普通にみられる。he proposed our *immediately drinking* a bottle together (Fielding: *Tom Jones*) (一緒にすぐに一びん飲むことを提案した) / the *shutting* of the gates *regularly at ten o'clock* had rendered our residence very irksome to me (*Shelley: Frankenstein*) (毎日決まって10時に門を閉めるので，私たちの住居は非常にめんどうくさいものになった) / without his *necessarily* and *at every moment being aware of it* (*Hawthorne*) [以上 MEG] (彼は必ずしもそれに気付いているわけではなくまたいつもそうであるわけでもない) / He always said the greatest mistake he ever made was not *coming here over twenty years before*. (Maugham: *Cakes and Ale*) [吉川 1949] (これまでの最大の失策は二十年以上も前にここへ来なかったことだと彼はいつも言っていた)

5. 時制と態

動名詞は起源的には名詞であったので，時制と態に関しては中立的であった。従って同一の形式で過去・現在・未来のいずれも示し，また能動・受動の両方を示すことができた。例えば，on account of *his coming* においては because he comes / he came / he will come のいずれの意味でも表わし得るし [MEG]，また Harriet only wanted *drawing out*, and *receiving* a few hints (Austen: *Emma*)

においては drawing out は受動的で，receiving は能動の意味を表わしている [MEG]。PE においても単純形の動名詞が受動の意味で用いられることはあるが，それは need, want, deserve, worth, past, require, bear などの後に用いられる特殊な場合に限られる。Her hair *needs* (*requires*, *wants*) washing. / That will not *bear relating*.（語るに耐えないものだ）[大塚・岩崎・中島 1959]　しかし，動名詞の動詞的性質が強くなると，時制と態の区別を示す語形成をとり始める。完了動名詞（having＋過去分詞）は ME 期まで生じず，Mod. E 初期，もっと具体的には16世紀末になって初めて出現する。この形式は17世紀後半になってもかなり稀である。Want of consideration in not *having demanded* thus much (Sidney: *Arcadia*) [Poutsma]（そんなに要求しなかったのには思慮が欠けていること）/ 'Twill weep for *having wearied* you (Shakespeare: *Tempest*)（あなたを苦しめたためにそれは泣くであろう）/ I had forgotten *having* ever *told* you half so much (Austen: *Mansfield Park*) [MEG]（私の記憶ではその半分も話していなかったはずだった）受動態の動名詞（being＋過去分詞）は15世紀初めに出現し，1600年までは明らかに稀にしかみられない。without *being stolen* (*Original Letters Illustrative of English History*) [Tajima 1985] / I spake.....of *being taken* by the insolent foe. (Shakespeare: *Othello*)（無礼な敵兵に捕えられたことを話した）/ the soldier's trade is not slaying, but *being slain* (Ruskin: *Unto This Last*) [MEG]（兵士の商売は殺すことではなく，殺されることである）

完了形と受動態の複合形式（having＋been＋過去分詞）は18世紀になって出現し，19世紀に発達したようである。his arm was not in a sling, and showed no symptom of *having been damaged* (Bennett: *The Card*) [MEG]（彼の腕は吊り包帯されていず，けがをしたようなところは少しもみえなかった）

1986年7月28日　脱稿

＊ 本稿の作成にあたっては金山崇教授より貴重な助言を数多く頂きました。ここに感謝の意を表します。

参 考 文 献

荒木一雄・宇賀治正朋（1984）『英語史ⅢA』
英語学大系第10巻　東京：大修館
Curme, G.O.（1912），"History of the English Gerund" *Englische Studien* 45. 小林淳男訳『動名詞の発達』東京：研究社 1977
Jespersen, O.（1909-49），*A Modern English Grammar on Historical Principles* Ⅰ-Ⅶ, London: George Allen & Unwin.
———（1948），*Growth and Structure of the English Language*, Oxford: Blackwell.
中尾俊夫（1972）『英語史Ⅱ』英語学大系第9巻　東京：大修館
小野　茂・中尾俊夫（1980）『英語史Ⅰ』英語学大系第8巻　東京：大修館
大塚高信（1951）『シェイクスピア及聖書の英語』東京：研究社
———（1976）『シェイクスピアの文法』東京：研究社
——・岩崎民平・中島文雄編（1959）『英文法シリーズ』東京：研究社
Poutsma, H.（Part Ⅰ 1904-1905 / Part Ⅱ 1914-1926），*A Grammar of Late Modern English*, Groningen: Noordhoff.
Quirk, R. & S. Greenbaum（1973），*A University Grammar of English*, London: Longman.
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, & J. Svartvik（1972）*A Grammar of Contemporary English*, London: Longman.
———（1985）*A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman.
Tajima, M.（1985）*The Syntactic Development of the Gerund in Middle English*, Tokyo: Nan'undo.
van der Gaaf, W.（1928）"The Gerund Preceded by the Common Case: A Study in Historical Syntax," *English Studies* 10. 山川喜久男訳『通格付き動名詞構造の発達』東京：研究社 1977
吉川美夫（1949）『英文法詳説』東京：文建書房